

月例研究会（2018年11月28日）

IALHI 第49回ミラノ大会 について

榎 一江

2018年9月13,14日,大原社会問題研究所が加盟している労働史研究機関国際協会(IALHI:The International Association of Labour History Institutions)第49回大会が,ミラノのジャンジャコモ・フェルトリネッリ財団で開催された。それに合わせて,ジェノバにある研究機関(ABMO:The Biographical Archives of the Workers' Movement等)を訪問し,所蔵資料やコメンテルン・プロジェクトについて打ち合わせを行った。本報告は,9月に実施したイタリア出張の報告である。

ABMOが推進するコメンテルン・プロジェクトは,1919年3月にモスクワで創設されたコメンテルンの初期の会合に世界中から参加した人々の記録を,その国の言語,英語,イタリア語の3か国語で刊行するものである。2016年のIALHIヘルシンキ大会に出席した際に,協力を求められ,大原社会問題研究所として協力してきた。具体的には日本からの参加者24人について,立本兼任研究員が日本語で評伝を執筆し,鈴木所長がそれを英訳し,報告者が窓口となって様々な問い合わせや資料の確認,キーワードの付与を行ってきた。今回,ジェノバにある関連機関を訪問し,このプロジェクトが予定通り,2019年3月の完成を目指して作業中であることを確認できた。

次に,ミラノで開催されたIALHIの報告に移ろう。まず,総会では,5年に1度の代表選

挙の結果,新代表にフリードリヒ・エーベルト財団(FES)社会民主主義資料室・図書館のAnja Krukeが選出された。また,加盟機関については,とくに南米からの参加が増えたことが報告され,スペイン語の使用を求める声が上がったことが印象的であった。

IALHIメンバーの活動報告では,スイス,オランダ,アルゼンチン,フィンランド,ベルギー,イタリア,イギリス,日本,ドイツ,アメリカ,ロシア,フランスから18本の報告があった。加えて,本大会の全体テーマである「68年の資料」については,イタリアからの3報告をもとに,ラウンドテーブルが設定されたのち,3つのキーワード(Power Mouvement Freedom)に即してアメリカ,フランス,イタリアに関する報告があった。「68年の資料」をめぐっては,日本でも国立歴史民俗博物館が企画展示『「1968年」無数の問いの噴出の時代』を開催し,大原社会問題研究所も所蔵資料を提供するなど協力した。50年を経て,いま様々な社会運動の資料をどのように収集し,整理,保存していくかは重要なテーマであろう。

ところで,2019年のIALHI第50回大会はスペイン,アルカラ・デ・エナーレスのパブロ・イグレシアス財団で開催される。同じく2019年には,セネガルでグローバル・レイバー・ヒストリーネットワークの会合が予定されており,日本で唯一の窓口となっている大原社会問題研究所は,引き続き,労働史研究の国際的なネットワークに積極的にかかわっていく必要があるだろう。

なお,今回の月例研究会には,資料調査に来所したHOSEIミュージアム開設準備委員会のメンバーにも加わっていただいた。デジタルアーカイブや著作権などアーカイブに関する現状と課題を確認することができ,有意義であった。(えのき・かずえ 法政大学大原社会問題研究所教授)